

董源「雲壑松風図」とその副卷

弓野 隆之

本館所蔵の董源「雲壑松風図」【図1】は阿部房次郎旧蔵品(阿部コレクション)の一件である。阿部が蒐集を行っていた大正から昭和初期にかけては、本図の評価は極めて高かったようである。だが、今日の視点よりすれば真蹟とは認めがたく、展示室に陳列されることはまずなかった。寄贈後に図版が紹介されたのも、大阪市立美術館編『大阪市立美術館蔵中国絵画』(昭和五十年、朝日新聞社)にとどまると思われ、その副巻については未公開である。

さて本館では、二〇一七年九月二日から十月一日にかけて、「長尾雨山が見た中国書画」展を開催し、併せて九月二日に中国近現代文化研究会とともに、シンポジウム「長尾雨山と中国近代」を行った(報告は『中国近現代研究』第一八号に掲載予定)。長尾は、内藤湖南らとともに阿部の中国書画収蔵における学術顧問的存在で、蔵品の箱書の多くは長尾に筆になっている。そこで本展では、阿部コレクション中の長尾の題字・題跋・箱書や、長尾旧蔵の中国絵画を陳列した【表】。その際、副巻に長尾が大字の行書で揮毫した題詩とともに董源「雲壑松風図」を展観することとし、改めて調査を行った。拙稿はその報告である。初めに訳読を示す。

【表】長尾雨山が見た中国書画陳列作品一覧(作品は全て館蔵品)

董源	雲壑松風図	阿部コレクション
長尾雨山	行草書董源雲壑松風図題詩	阿部コレクション
蘇軾	行書李白仙詩	阿部コレクション
長尾雨山	楷書蘇軾李白仙詩跋	阿部コレクション
黄公望	江山幽興図 長尾雨山行書跋	阿部コレクション
長尾雨山	隸書李成王暉読碑窠石図副巻題字	阿部コレクション
王淵	竹雀図	阿部コレクション
長尾雨山	篆書・隸書王淵竹雀図箱書	阿部コレクション
毛奇齡	看竹図 長尾雨山楷書箱書	阿部コレクション
呉雲	雲根図	長尾雨山旧蔵
胡遠	洞天一品図	長尾雨山旧蔵
蒲華	「与長尾雨山」雲根図	長尾雨山旧蔵
陸恢	「与長尾雨山」山塢雲歸図	長尾雨山旧蔵
呉昌碩	「与長尾雨山」山水図	長尾雨山旧蔵
鄭孝胥	「与長尾雨山」墨松図	長尾雨山旧蔵
王震	東坡抱硯図	長尾雨山旧蔵

本幅 絹本墨画淡彩 二三三・三×一四九・七

〔宋徽宗御題〕【図2】

雲壑松風圖、甲辰御題、花押「御書」(朱文方印) 宋・徽宗

朕閱董元畫當以此爲第一 宋・徽宗

〔収蔵印記〕【図3】

1 雙龍(朱文肖形円印) 宋・徽宗 ○

2 宣和書寶(朱文方印) 宋・徽宗 ○

3 石渠寶笈(朱文方印) 清・高宗 ○

4 瑞文圖書(朱文方印) 南宋・劉希 ○

5 乾隆御覽之寶(朱文橢円印) 清・高宗 ○

6 御書(朱文方印) 宋・徽宗 ○

7 宣元閣寶(朱文方印、宣文閣寶の誤りか) 元・惠宗 ○

8 乾隆鑑賞(白文円印、羅振玉は乾隆鑑藏と記す) 清・高宗 ○

9 御府寶繪(朱文方印) 金・章宗 ○

10 三希堂精鑑璽(朱文長方印) 清・高宗 ○

11 石渠定鑑(朱文円印) 清・高宗 ○

12 □□子? □(白文方印) ○

13 □□由?(朱文方印・右缺) ○

14 □□谿辺氏畫印(朱文方印・右少缺) ○

15 世寶(白文円印) ○

16 □□清玩珍寶(朱文方印・右缺下缺) ○

17 弇州山人(白文長方印) 明・王世貞 ○

18 王元美鑒賞(朱文長方印・下缺) 明・王世貞

19 子孫世昌(白文方印) 明・項元汴

20 弇州山人(白文方印) 明・王世貞

21 翰林學□□(朱文方印・左缺) ○

22 詒晉齋印(白文方印) 清・永理 ○

23 皇十一子(朱文方印) 清・永理 ○

24 内府祕書之印(朱文方印) ○

〔董其昌辺幅題識一(別装)〕【図4】絹本墨書 七五・五×五・〇

余閱内府收蔵董北苑畫、此圖誠爲天下第一

〔王世貞辺幅題識二(別装)〕【図5】絹本墨書 三六・五×一一・三

觀古人畫、無出人意表豪發胸襟者、定非名筆、余閱兩宋人山水、無

有出北苑之右、而北苑此幅、恐生平亦無其右者、何幸得懸齋頭、日

盤礴其間、則享此公清福不淺矣、瑯琊王氏元美自識

〔世貞〕(白文方印)

〔不明氏旧題簽(別装)〕【図6】紙本墨書 五三・一×三・二

北宋董元雲壑松風圖、天下第一神品

〔箱書〕【図7】(全体)木製 一六五・五×一六・五

石渠舊藏、北宋董北苑雲壑松風圖、天下第一神品 長尾雨山

〔香雪書屋書畫印〕(朱文方印) 山本悌二郎

〔二峯所藏書畫第一神品〕(朱文方印) 山本悌二郎

〔羅振玉外題〕【図8】紙本墨書 四四・八×二・五

天下第一董北苑雲壑松風圖題跋甲卷、永豐鄉人題

〔羅振玉印〕（白文方印）、〔羅叔言〕（白文方印）

〔羅振玉題字〕【図9】紙本墨書 四八・七×一三三・四

優入聖域、宣統丙辰冬、上虞羅振玉題

〔振玉印信〕（朱文方印）、〔後四源堂〕（白文方印）

〔コロタイプ図版〕紙本 四八・六×二五・四

〔羅振玉題跋〕【図10・11】紙本墨書 四八・二×一三三・六

北苑雲壑松風圖、大幀雙絹⁽¹⁾、高達初尺九尺八寸八分、廣五尺有七

分、幅之上端、橫書雲壑松風圖甲辰御題、後有押字、上鈐御書二字

璽、又縱書朕閱董元畫當以此爲第一、幅外裱綾上、題余閱內府收藏

董北苑畫此圖誠爲天下第一八字、不署款、驗其書法、乃董文敏公

晚年書也、幅上鈐印甚多、絹黯多不可識、其可識者、宣和書寶、宣

元閣寶、御府寶繪、瑞文圖書、石渠寶笈、乾隆御覽之寶、乾隆鑒藏、

三希堂精鑒璽、石渠定鑒、詒晉齋印、皇十一子、凡十一印、蓋在宋

代爲御府所藏、又入我朝內府、後以賜成哲親王、不知何時流落人間、

此圖淋漓浩瀚、平澹天真、白雲依山、滃鬱如活、長松垂枝、臨風疑動、

徽宗及董文敏竝推爲天下第一、洵非溢譽、嘗謂米海嶽評論書畫、俯

視一切、雖唐宋宗工、每加苛論、惟低首下心于北苑、其後宋元明諸

大家、靡不導源于此、得其一體、已足震動一世、語其薪傳、右丞以後、

當推北苑爲次祖、雖荆關諸大家、亦但有退而稱宗已耳、此古今所共
認、非予一人之私言矣、永豐鄉人羅振玉書于海東僑舍之後四源堂

〔羅振玉印〕（白文方印）、〔羅叔言〕（白文方印）

注 『南宋衣鉢跋尾』との文字の異動

(1) 大幀雙幀絹 「絹本、雙幀大幀」に作る。

(2) 達初尺 この三字なし。

(3) 有「零」に作る

(4) 書法 「筆迹」に作る。

(5) 識 「辨」に作る。

(6) 海嶽 「老」に作る。

(7) 書畫 「古今書畫」に作る。

(8) 雖 この字なし。

(9) 論 「虐」に作る。

(10) 于「於」に作る。

(11) 其後 この二字なし。

(12) 于「於」に作る。

(13) 震動 「横行」に作る。

(14) 以「而」に作る。

(15) 此 下に「固」字あり。

〔長尾雨山題詩〕【図12】 紙本墨書 五六・五×二五六・一

〔二生好人名山游〕（朱文長方印）

萬壑雲湧瞻籟生、謾謾風入羣松鳴、
眼前空翠濕素壁、謝眺門外青山橫、
崢嶸巖巖餐不盡、天下名山萃宣城、
曲澗橫石蹙流泉、琤琤響振環珮聲、
噴薄粉沫成夕霏、搖曳林際烟霧輕、
倏忽冥濛失晝夜、山人欲行不可行、
北苑遺老唐孤臣、國破山河愁不平、
乾坤何地容獨往、畫裏欲尋舊紫荊、
畢生祇寫江南山、一片白雲萬古情、
縹緲玄圃望何處、赤城霞氣半天明、
道君風流愛畫圖、不省烟【塵】昏太清、
五國城中風雪夜、雲壑松風入夢縈
笮洲老友屬題董北苑雲壑松風圖、癸酉除前三夕、甲
〔長尾甲印〕（白文方印）、〔雨山居士〕（朱文方印）

一、題記と収蔵印

本幅上方に宋・徽宗の兩御題【図2】がある。もと辺幅にあった董其昌【図4】と王世貞【図5】の題記が、旧外題【図6】とともに別装されて函内に納められている。

収蔵印は絹が非常に黯く、判読し難いものが多い。後述羅振玉『南宋衣鉢跋尾』は徽宗御題の璽と「○」を付した十一印を収録し、山本悌二郎『澄懷堂書画目録』もこれに従う。阿部孝次郎『爽籟館欣賞』第二輯の原田謹次郎「解説」では、これらに「○」を付した五印を加えている（「弇州山人」は「□□山人」とする）。

この度の調査では、デジタル画像の処理によって、計二十四印の存在が明らかになった。印文や他の書画作品での用例のから、推測される所蔵者を一覧に記した。

これら題記と印記を合わせれば、北宋・南宋・金・元・明・清の歴代御府に蔵されたことになる。明では項元汴・王世貞が所蔵し、内府に入つて董其昌が過眼したと考えられる。清では成親王に下賜された。

しかしながら、上記の題記や収蔵印を他の遺例と対照すれば、眞贋という点でいずれもかなり問題があることが判る。逆に言えば、それらによつて本幅の制作時期の上限を定めることができよう。また絹本の汚損状態もかなり不自然なところが見られ、縁辺部では古色を出すために鈐印が肉眼では全く確認できない程にまで加工されている。

二、羅振玉

董源「雲壑松風図」を日本に齎したのは、辛亥革命後来日した羅振玉だと思われる。羅は日本に存する中国古画を編し、大正五年（一九一七）から七年にかけて縦五八・四×横三七・六糧という大判のコロタイプ図版『南宋衣鉢』五冊を、大阪の博文堂から出版した。本図は、大正五年六月五日付で発行されたその第一冊に、李成「雪峯図」、巨然「写唐人詩意图」、董源「無款山園枯木図」などとともに載せられた。別に『南宋衣鉢跋尾』（以下『跋尾』）二冊がある。一冊は羅振玉が自ら撰した各図の題跋を録し、同年六月二十五日の発行。もう一冊は羅跋の長尾楨太郎（雨山）による訓読で、同年十一月四日の発行となっている。

副巻は、このコロタイプ印刷に伴って羅振玉によって作られたものと推定される。羅の篆題「優人聖域」【図9】は唐・韓愈が「進学解」で孟子と荀子とを「絶類離倫、優人聖域（類を絶し倫を離れ、優に聖域に入る）」と評したのにもとづき、人並みはずれて聖域に入っていることをいう。紀年は「宣統丙辰冬」、即ちコロタイプ版が出版された一九一七年の冬である。款記に続いてこの印刷図版を題字・題跋に合わせた寸法に裁断して挿入している【図10】。外巻の題簽【図8】も羅の揮毫である。

なお、題字の落款印と題跋の款記に見える「後四源堂」は、羅がこの時四件の董源画を有して号したものである。『南宋衣鉢』には、本図の他に「山園古木図」「溪山行旅図」「羣峯霽雪図」が羅の所蔵品として挙がっている。董其昌がかつて「瀟湘図」「溪山行旅図」「龍宿郊民図」「夏山図」を珍蔵して「四源堂」と号したのに倣ったの

である。

次に羅跋【図11】について検討する。原文に付した注は、羅の『跋尾』との異動を示す。訓読は長尾の『跋尾』にあるので、ここでは図の評を述べた部分に止める。

初めに画幅上部にある横書・縦書の宋・徽宗の御題を録し、表装上の題記を書風から董其昌晩年のものと断定する。次いで徽宗「御書」璽とその他の收藏璽印十一を録して、宋代御府から清朝内府、成親王までの通伝を記す。そして

此の図淋漓浩瀚、平澹天真にして、白雲山に依り、滄鬱活けるが如く、長松枝を垂れ、風に臨みて動くかと疑ふ。徽宗及び董文敏並びに推して天下第一と為せしは、洵に溢誉に非ず。嘗て謂へらく、米海嶽書画を評論して、一切を俯視し、唐宋の宗工と雖も、毎に苛論を加ふれども、惟だ北苑にのみ首を低れ心を下せり。其の後の宋元明の諸大家、此れに導源せざる靡く、其の一体を得るも、已に一世を震動するに足る。其の薪伝を語れば、右丞以後、当に北苑を推して次祖と成すべし。荆関の諸大家と雖も、亦た但だ退いて宗を称する有るのみ。此れ古今共に認むる所にして、予一人の私言に非ず。

と、本図を徽宗や董其昌が指摘したように、「天下第一」の董源画と言つても過言ではないと称賛している。

三、山本悌二郎

羅振玉が日本滞在中、携えてきた書画などを売って生活や出版などの資としていたことはよく知られている。「雲壑松風図」を入手したのは山本悌二郎であった。その購入時期は定かでないが、羅の帰国は大正八年（一九一九）であるから、それ以前に山本ないし仲介者に渡っていたとみるのが自然であろう。山本の蔵品目録である『澄懷堂書画目録』（以下『目録』）の刊行は昭和六年（一九三一）で、この巻一に収録されている。本図に対する評価の部分は、『南宋衣鉢』をほぼそのまま援用して記述がなされている。

この頃までに羅の他の蔵品や完顔景賢の蔵品なども、多く日本人の所有に帰していった。『目録』では

北苑の畫蹟にして近世の著録に載する所に、群峯霽雪圖卷、夏景山口待渡圖卷、瀟湘圖卷、秋山行旅圖軸、溪山行旅圖軸等あり、溪山行旅圖軸は所謂「江南半幅」にして、近年羅叔言の收藏を経て大坂の小川氏に歸せり。又北京完顔景賢の舊藏に係る平巒遙村圖軸あり、今東京竹添氏の獲る所となれり……此の雲壑松風圖も亦無款にして、宋元以來、北苑として傳へられ、明に至りて董其昌定めて北苑と爲せること前に記する所の如し。溪山行旅圖、平巒遙村圖と共に、日東今ま北苑の眞蹟三軸を有するは、聊か以て快とするに足る。

と、その獲得の様子を誇らしげに語っている。

本幅にとって山本の果たした着目すべき役割は、現状に改装したことである。『南宋衣鉢』では【図10】に見るように、董其昌の題記【図4】と王世貞の題記【図5】が幅の右上と左下に嵌装され、羅跋も

それに言及していた。『目録』に

右方上邊幅に「余閣内府收藏董北苑畫、此圖誠爲天下第一」の十八字を嵌装せり、款無しと雖も一望して董其昌が晩年の筆たるを知る、是れもと邊幅に在りたる題識にして、改装するに當り割截して茲に嵌装せしものなり……右方下邊幅に明の王元美世貞の題記あり、曰はく「古人の畫を觀るに……」と。

とあるので、執筆時にあつてはまだ改装を施していなかったことが判る。改装に際して、山本は函【図7】を仕立てている。現状ではこの兩題記は旧題簽とともに本幅と別に表具をされて、函内に納められている。そして函には題字を刻されており、自らの印「香雪書屋書畫印」「二峯所藏書畫第一神品」を鈐している。ただし、「石渠舊藏、北宋董北苑雲壑松風圖天下第一神品」の書は山本の筆蹟ではなく、書風から推して長尾雨山の揮毫であろう。

四、阿部房次郎

山本に次いで、本図は阿部房次郎に歸した。阿部の蔵品図録『爽籟館欣賞』では、第二輯（昭和十四年刊）に収められる。阿部の求めに応じて、長尾が題詩を副巻に揮毫したのは、癸酉（昭和八年、一九三三）の歳末、山本の『目録』刊行から僅か二年後のことである。縦幅の広い卷子のためであろう、長尾の遺墨にあつては、豎軸にあつては時折見受けられるが、跋では珍しい大字の行草で筆を揮るっている。

やや難読の箇所があるほか、一文字缺字がある。幸い京都国立博物館名誉館員の西上実氏より、同館に保管されている長尾雨山関連資料のなかに「癸酉詩草」なる稿本が存し、この一首が含まれてい

るとのご教示を賜わり、当該部分を補訂することができた。試みに訓読と日文訳を示す。

(引首印) 一生名山に入りて遊ぶを好む

李白「廬山謠寄盧侍禦虛舟」に「五岳尋仙不辭遠、一生好入名山游」とある。

万壑 雲湧き籟の生ずるを瞻、謾謾として風 羣松に入りて鳴る
許多の谷に雲が湧いて響きが生じ、風は松林に入つて謾謾と鳴つて
いる

籟は阿部房次郎の室号「爽籟館」にかける。

眼前の空翠 素壁を湿し、謝朓の門外 青山横たはる

眼前にたちこめる山気が山肌をうるおし、謝朓の門外に横たわる青
山を思わせる

謝朓(464-499)南齊の人、山水詩を善くした。宣城太守のとき安徽省
当塗県の青山に室を築いた。

崢嶸嶺巘 餐じて尽くせず、天下の名山 宣城に萃まれり

険しい山容美は味わい尽くせず、天下の名山は宣城にあつまつてい
る

曲澗の横石 流泉に蹙り、琤琤として響振す 環珮の声

曲がりくねった谷河に横たわる石は泉の流れをせばめ、琤琤と佩玉
の音が響くかのよう

粉沫を噴薄して夕霏を成し、林際に揺曳す 烟霧軽し
粉末が噴きあがるように夕もやとなり、かすみは軽やかに林の際に
ゆれたなびく

倏忽にして冥濛 昼夜を失ひ、山人行かんと欲するも行く可からず
にわかにならなくなって昼夜を失い、山人は歩まんとするも歩めない

北苑遺老 唐の孤臣、国破れて山河平らかならざるを愁ふ

董源は先朝の遺老で南唐の孤臣、国が破れ山河に平穩が訪れないの
を愁う

董源は南唐の中主に仕え、北苑副使となった

乾坤何れの地か独往を容れんや、画裏尋ねんと欲す 旧の紫荆

天地のどこで自分の信じる道を一筋に進めようか、画中に昔日の紫
荆(ハナズオウ)の花を尋ねてみよう

畢生祇しみて写す江南の山、一片の白雲 万古の情

生涯謹んで江南の山を画き、一片の白雲にも万古の情があふれる

縹緲たる玄圃 何れの処にか望まむ、赤城の霞氣 半ば天明

「画いたのは」何処に望めるのであろう遙かなる崑崙山の神仙の居
所、半ば夜が明けようとする赤く雲霞の姿に譬えられる赤城山

道君風流 画図を愛し、烟塵太清を昏ますを省みず

宋の徽宗は風流で絵画を愛し、戦乱の煙が空をくりますのも氣にと

めなかつた

五国城中 風雪の夜、雲壑松風 夢に入りて繋る^{めく}

五国城での風雪の夜、雲壑松風図は夢の中をめぐっていたであろう

靖康の変で金に俘えられた徽宗は、天会十三年（一一三五）五国城（黒竜

江省依蘭県）で崩じた。

笹洲老友、董北苑の雲壑松風図に題するを属す、癸酉除前三夕、甲

一九三三）大晦日三日前の夜、甲

「長尾甲印」「雨山居士」

笹洲は阿部房次郎の号

『爽籟館欣賞』第二輯の作品解説は原田謹次郎が担当したが、本

図の評価については、山本の『目録』同様、『南宋衣鉢跋尾』の羅

跋が基本となり、これに作画上の技術的解説を加えているに過ぎな

い。長尾の題詩によっても、その評価の程が知られよう。

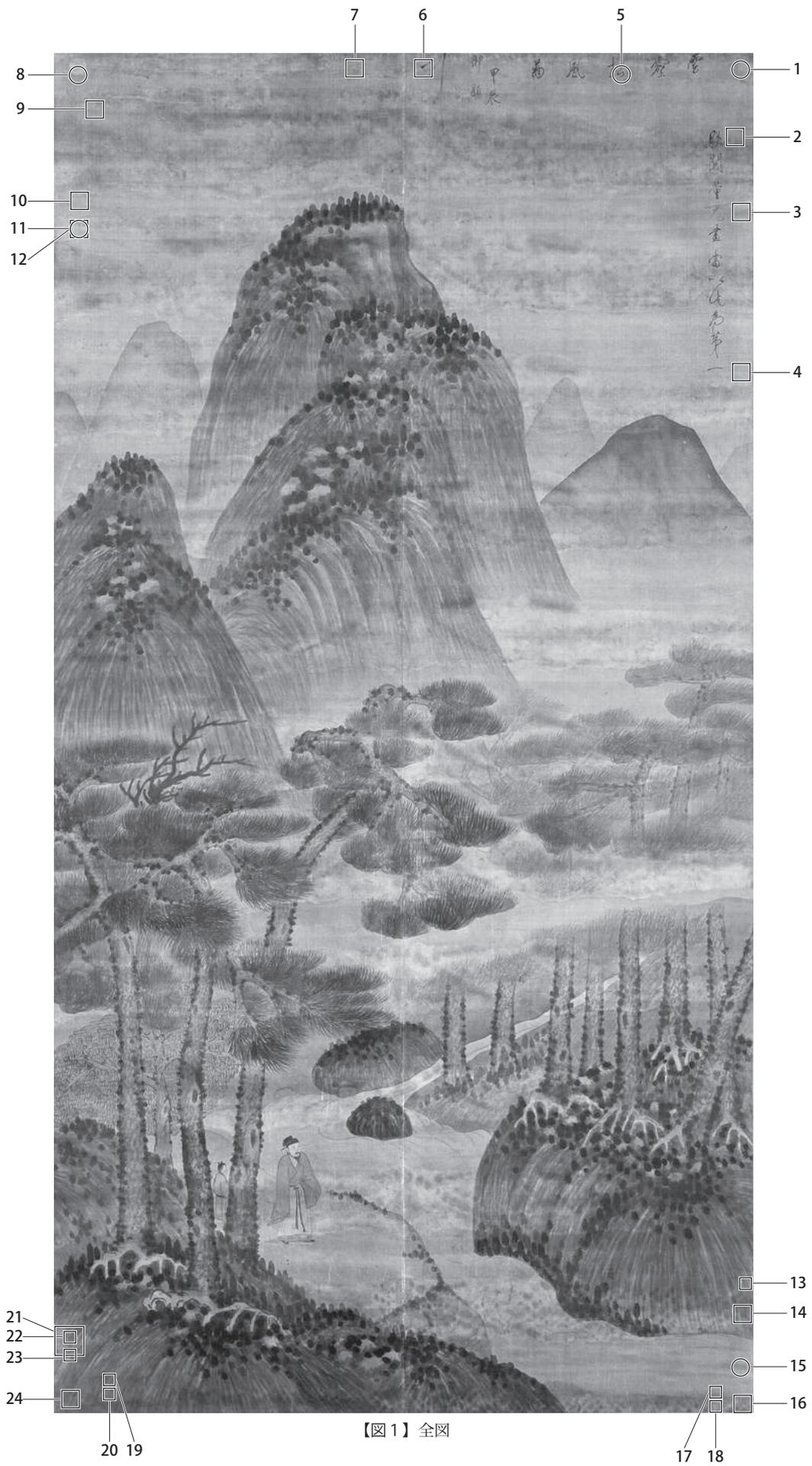
おわりに

董源「雲壑松風図」本幅は多くの問題を抱えてはいるが、実際に制作された当時の偽作者の指向が見て取れる資料である。副巻の羅振玉や長尾雨山の遺墨は、書法作品としてのみならず、付属品も含めて日中近代における文物収蔵史、書画鑑賞史上の資料としても貴重なものである。

最後に一つ加えておきたい。董源「雲壑松風図」は阿部コレクションの一点として、昭和十七年十二月二十四日付で阿部孝次郎氏より寄贈を受けた。だが、この時点では副巻を伴ってはいなかったのである。本館の蔵品台帳によると、副巻は昭和五十五年三月二十五日付で京都の古美術商から購入しているのである。その経緯について、前任の中国書画担当者や古美術商の現在の御主人などに問い合わせてみたが、残念ながら詳しいことは判らなかつた。見出ししてくれた前輩に感謝したい。

付記

長尾雨山題詩の釈読と解釈については、西上実先生はじめ関西中国書画コレクション研究会、中国近現代文化研究会の会員の方々より貴重なご教示を頂きました。収蔵印の撮影とデジタルデータ処理は、本年度の当館インターンで大阪大学大学院生波瀬山祥子氏、同永谷かこの氏のご協力を頂きました。深く御礼申し上げます。



【图1】全图



【圖2】徽宗御題

【圖3】



【圖2】徽宗題記



05 乾隆御覽之寶



04 瑞文圖書



03 石渠寶笈



02 宣和書寶



01 雙龍



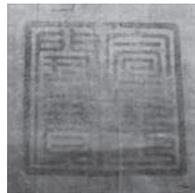
10 三希堂精鑑璽



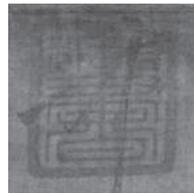
09 御府寶繪



08 乾隆鑑賞



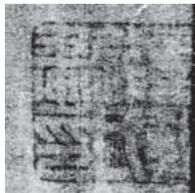
07 宣元閣寶



06 御書



15 世寶



14 □谿迎氏畫印



13 □由?



12 □□子?□



11 石渠定鑑



20 弇州山人



19 子孫世昌



18 王元美鑒賞



17 弇州山人



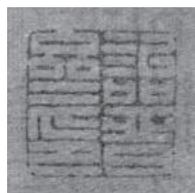
16 □□清玩珍寶



24 內府祕書之印



23 皇十一子



22 詒晉齋印

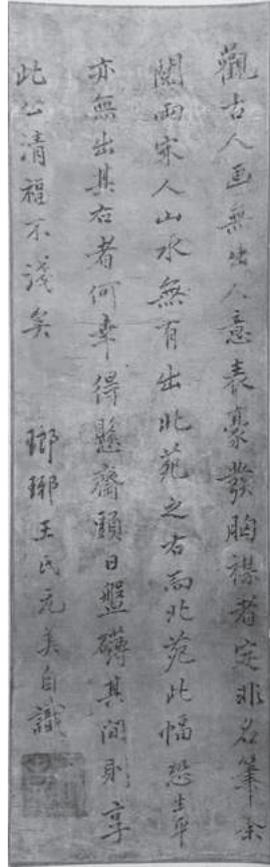


21 翰林學□□□

【図4】董其昌識語



【図5】王世貞識語と款識



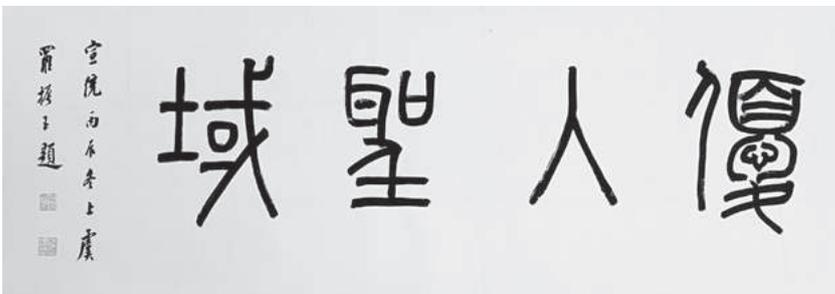
【図6】旧題簽



【図7】箱蓋全体 箱書 箱書印



【図8】副卷題簽と印



【図9】羅振玉題字と印



【図10】図版及び羅振玉跋

